

## 倉敷「大原美術館」へ行く

大阪に転居してから、京都・奈良・神戸などに気軽に出かける。名古屋時代に比べて、行動範囲が広がった。関西圏からすこし足を伸ばして、倉敷まで行った。お目当ては、大原美術館である。大阪の自宅から岡山から倉敷へと、意外なほど早く美術館に着いた。

大原美術館のリーフレットから一大原孫三郎(1880～1943)は、倉敷紡績などの企業を経営する一方で、病院や研究所を創立するなど公益性の高い諸事業を推進しました。その孫三郎の経済的支援で 1908 年に渡欧した洋画家の児島虎次郎(1881～1929)は、自らの画業の研鑽



に励むと共に、西洋の優れた美術作品の収集と公開を孫三郎へと提言します。それに応じた孫三郎の支援で、虎次郎はさらに 2 度の渡欧を果たし、クロード・モネやアンリ・マティスから直接作品を購入するなどして西洋の近代美術を、またエジプトや西アジアの古代からの作品を収集しました。それらの収集品と虎次郎自身の作品を公開するために 1930 年に創設されたのが大原美術館です。

第二次大戦後、美術館の運営を担ったのは、孫三郎の長男大原総一郎(1909～1968)でした。総一郎は「美術館は生きて成長していくもの」との信念に基づいて、西洋の前衛的な作品や、今では日本の近代美術史を語るには欠かせないものとなった明治以降の洋画、さらに、濱田庄司や河井寛次郎、棟方志功など民藝運動を主導した作家の作品へと収集ジャンルを大きく広げ、それらのための展示場を新設しました。

このように、大原美術館は常に同時代の新たな表現を受け止めながら歴史を積み重ねてきました。21 世紀の現在では、日本の現代作家との協同事業に力を入れ、その作品の収集と公開を続けています。

大原美術館は写真のようにギリシャ神殿のような外観であり、1930 年の創立当時のままの姿をとどめている。重厚な建物の広々とした空間のなかに、数多くの作品が展示され、朝も早かったので、ゆったりと鑑賞できた。パブロ・ピカソ「鳥籠」、クロード・モネ「睡蓮」、エル・グレコ「受胎告知」などの作品に引きつけられた。



本館から分館、そして工芸館・東洋館へと回った。工芸館・東洋館は、もとは大原家の米蔵だった。そこに展示されていた棟方志功や河井寛次郎の作品も、青森や京都で見たときを思い起こしながら鑑賞した。大原美術館あたりは、「美観地区」として整備されており、大勢の人が散策していた。雨が降り出したので、急いで倉敷駅に向かった。

(2019 年 2 月 17 日)